



Title	朝鮮語の「nin (は)」と「ka (が)」 : 日本語朝鮮語対照言語学の基礎として
Author(s)	前田, 綱紀
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1978, 12, p. 15-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56455
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朝鮮語の「nin (は)」と「ka (が)」

—日本語朝鮮語対照言語学の基礎として—

前 田 綱 紀

序

玄界灘を中にして日本の隣に朝鮮がある。その朝鮮では、紀元の前後において、南方の韓語と北方の夫余語が話されていたとされている。⁽¹⁾ 夫余系の高句麗語が語彙の点から推測して日本語と似ていたのではないかとされているのは、周知の事実である。⁽²⁾ 現代の朝鮮語は、韓語から派生された新羅語の系統をひいている、とされている。日本語と朝鮮語は、共にアルタイ諸語と親縁関係にあるのではないかと想像されることもあり、種種の点で著しい相似を示している。

日本語と朝鮮語の類似性は、以下の事実により具体的に示される。藤岡勝二・服部四郎の両氏が、所謂アルタイ諸語と日本語の共通点として各々14・10項目をあげられたことは、広く知られている。⁽³⁾ 一方、朝鮮語の特徴として、金敏洙氏は24項目を指摘される。⁽⁴⁾ これらは、日本の学説に依拠しており、多くの項目が前述のアルタイ諸語と日本語の共通点と一致する。⁽⁵⁾ 金敏洙氏の説を若干引用してみよう。

- 「国語は、語頭に r や ni がくことを避ける」
- 「国語は、語頭に有声音を避ける。破裂音・摩擦音の有声音は、語頭で発音されない。それ故に、このような外国語が輸入されたならば、全て無声音にする現象が見られる」
- 「国語は、語頭にふたつ以上の子音群を避ける」

アルタイ語の立場より見て、日本語と朝鮮語は、以上のように類似している。ところが更に仔細に比べると、たとえば次のような相違点がある。

1. 否定表現において日朝両言語の語順が異なる場合がある。「行かない」を朝鮮語では「an kanta」と言う場合がある。直訳すれば「ない・行く」である。
2. 動詞の時制で差が生ずる場合がある。たとえば、「生ずる・似ている」は、朝鮮語では過去形の「seŋkjos'ta・talmas'ta」が普通とされる。⁽⁶⁾

3. 助詞の用法にも差がある。たとえば、

(例1) mal hanmalika talljowas'ta.

馬 一頭が 走って来た。

上の文は、普通の日本語では「馬が一頭走って来た」となる。

以上の諸点が日朝両言語の差異の例として指摘できるのであるが、⁽⁷⁾ 3の助詞に関しては更に興味ある問題がある。

日本語には、所謂主語を示すとされてきた助詞「ハ・ガ」がある。朝鮮語にもそれにほぼ相当する助詞がある。本稿では、それを扱う。「ハ」に相当するものは「nin, in」であり、「ガ」に相当するものは「ka, i」である。⁽⁸⁾ 文を構成するうえで重要な働きをするこれらの助詞は、日朝両言語の間で著しい一致を示す。そこで「ハ・ガ」について問題になるようなことが、同様に「nin ; ka」でも問題となる。たとえば、これらの助詞は、その用法においてどのような差異があるか、というようなことである。

また、「ハ・ガ」と「nin・ka」を比べると、全ての点で一致するわけではない。本頁の3のように差異もある。このような差異が他にもあるかどうかということも興味ある問題である。

本稿の意図するところは、次のことである。「nin・ka (ハ・ガ)」は、どのような性質を持った助詞であるか。その用法は、互いにどのように異なる

るか。また、「ハ・ガ」との用法の差があるとすれば、どのような場合か、というような点である。

1 従来の説

この章では、「nin・ka (ハ・ガ)」について従来どのようなことが言われてきたかを見てゆく。例として金敏洙氏・河野六郎氏の説をとりあげる。

1-1 金敏洙氏の説⁹⁾

「nin・ka」は、助詞に属する。助詞とは「構文上、要素と要素の間の文法的関係」をあらわし、「ある語彙範疇に接続したり包含され、機能を表示する指標の役割」を果すとされている。

助詞は、相対性(或いは位置性)と、無標性を基準にして、相互関係のみを示す格助詞と、意味を加える補助詞に二分される。「nin」は補助詞に、「ka」は格助詞に属する。

「nin」が属する補助詞というのは、「意味を加えることより元来無標性がなく、従って相対性や叙述性」もない助詞である。「nin」は、対照の指摘という意味を持ち、種々の格を示す。

これに対し「ka」の属する格助詞は、次のように規定される。「格助詞は全て格を表わし、補助詞のような如意性がなく、相対性と無標性」があることを原則とする助詞である。「ka (ガ)」は、主格を示す格助詞である。即ち、叙述の主体であることを示すものである、とされる。

以上が金敏洙氏の説であるが、これに対しては若干の問題点がある。第一点は、「nin : ka (ハ・ガ)」の具体的な用法について言及していないということである。第二は、格助詞の相対性である。即ち、語は相互の位置関係からその機能が決定され、格助詞はそれを明確にするにすぎない、と

される。しかし、必ずしもこうとは断言できないと思われる。

1-2 河野六郎氏の説⁽¹⁰⁾

「助詞及び助動詞（接尾辭）は體言或いは用言の附屬部分」とされる。

「體言は…助詞を用ゐることなくそのまま用ゐられる」場合がある。

「助詞は體言の種々な規定を明示する場合に用ゐられる」 「ka (ガ)」は、体言に用いられる助詞に属し、主格を示す。「ka (ガ)」の「特殊な用法として動詞 doi-《ナル》の補語を示す場合がある。…又 'ani-《デナイ》の補語を示す」

助詞の中には、体言にも用言にも用いられるものがある。「nin (ハ)」はこれに属する。

「ガとハの區別は日本語でも定義するのが中々困難であるが、朝鮮語でも丁度同じ様に -i/ga と -'un/-nun の區別がある。しかしその用ゐられる範圍は必ずしも日本語と同じではない」

河野氏の説では、「ハ・ガ」と「nin・ka (ハ・ガ)」の間には用いられる範圍にずれがあるとされる。これについて具体的な言及はないが、私見では次のようになる。

①同じ意味の文で「ガ」「ka (ガ)」が用いられながら、その位置が異なる場合。例として(例1)があげられる。

②日本語では「ハ」が期待される所に「ka (ガ)」が現れる場合。朝鮮語では、次の文はごく普通の文である。

(例2) neka kipuni ōhōi anhta.

私は 気分が よく ない。

以上が「nin・ka (ハ・ガ)」に対する従来の説の例である。これらには共通の問題点がある。それは、諸説が形式的に「nin・ka (ハ・ガ)」を区別しているだけで実際の用法については詳細な言及をしていない、という

ことである。このことから「nĭn・ka (ハ・ガ)」の研究は充分なされたとはいいがたい。筆者はこの点に留意しながら考察を進めていった。その際資料は現代文学からとった。従って本稿の例文は大部分文学作品からの引用である。

2 「nĭn・ka (ハ・ガ)」の性質・用法

この章では、「nĭn・ka (ハ・ガ)」の性質・用法の実際について見てゆく。

2-1 「名詞+nĭn」「名詞+ka」の影響の及び方

今回の考察の結果、「nĭn・ka」の性質として次のことがまず指摘される。即ち「名詞+ka」は狭い範囲に影響力を持つ。それより後の部分は、必ずしも全てが「名詞+ka」に対する叙述ではない。これに反し、「名詞+nĭn」は広い範囲に影響力を持つ。それより後、文末までが「名詞+nĭn」に対する叙述となりうる。時には後続の文までがそれに対する叙述になりうる。

「名詞+ka」が狭い範囲に影響力を持つということは、次のようなことである。「名詞+ka」は、それが含まれる文中で、そのすぐ後にあり意味的にみてその名詞に対する叙述をなす語と結合する。そして、その結合で役割を終える。たとえば次のようになる。

(例3) op'a neka mal k'it^h mata op'alil kĭlkōnohko is'nĭn
 兄さん 私が ことば 端ごと 兄さんを 引いて いる
 kōsĭl alu?
 のを 知っ てる?

(例3)の場合、「neka (私が)」は、「kĭlkōnohko is' (引きつけてい)」と「al (知る)」の双方と結合しうる。しかし、実際には前者と結合しその役割を終える。「nanĭn (私は)」とすれば、これは「al (知る)」ま

でかかってしまう。ところが、こうすれば意味的におかしくなってしまう。
何故ならば、

nanin … kōsil alu?

私は … のを 知ってる?

ということになるからである。このようなことから、「名詞+ka」は狭い範囲にしか影響力を持たないことがわかる。

上のkaの性質とは異なり「名詞+nin」が広い範囲に影響力を持つということは、次のようなことである。「名詞+nin」がくると、その後の叙述は、適当な区切れがあるまでその名詞に対しての叙述と見做されてしまう。適当な区切れとは、文の終りとか、他の「名詞+nin」のある箇所である。

(例4) <t^henisī> lil nanin jōki oki cōneto hako is'os'cīman

テニスを 私は ここ 来る 前にも して いたが

kisuli puč'ōknin kōsīn tēpupuni kīi tōkpunita.

技術が 急に進んだ のは 大部分が 彼の おかげである。

たとえば(例4)においては、「nanin(私は)」というように「nin(ハ)」がついていることにより、「nanin(私は)」は連体修飾節を越え、「hako is'os' (していた)」にまでかかる。「neka(私が)」とすると、それは「o(来)」と結合し、「cōn(前)」に対する連体修飾節を形成し、それで役割を終えてしまう。その結果、「hako is'os' (していた)」のいわゆる主語がなくなってしまうのである。

ところで、「名詞+ka」の、そのすぐ後の叙述と結合し役割を終えるという性質により、連体修飾節中の所謂主語は、「名詞+ka」とされることが多い。「名詞+nin」は、適当な区切れまでその名詞に対する叙述となることから混乱が生じやすく、原則として避けられる。但し、(例4)のように連体修飾節内の動詞と、その後にある動詞の所謂主語が同一である場合は別である。この時は連体修飾節内の所謂主語は、普通の場合とは逆に

「nin」で示される。

連体修飾節内の所謂主語を「nin」で示す場合が、もう一種考えられる。

(例5) kīnin čohahes'čiman kīnjonnin čohahači anhas'ton

彼は 好きだったが 彼女は 好きで なかった

kīlimi ikosita.

絵が これだ。

連体修飾節における所謂主語は「ka」で示されるのが普通である。ところが「nin」で示される場合もある。この例外的な「nin」の用法より、「nin」は、これがつく名詞を他の名詞と対照させるという機能を持つことが了解されるのである。

以上で明らかになったのは次のことである。「名詞+nin」は広い範囲に影響力を持ち、「名詞+ka」は狭い範囲に影響力を持つ。このことより連体修飾節内の所謂主語は「ka」で示される。ところがこれに例外があり、その例外から「nin」は、名詞を対照させるという性質を持つことがわかる。

2-2 「疑問詞+nin・ka」

「疑問詞+nin・ka」については、筆者の知る範囲では、従来あまり言及されていないようである。以下に、この問題について考察する。

2-2-1 「nuku+ka」

朝鮮語の「nuku」は、日本語に訳した場合に次の例文から明らかのように二通りの訳が可能である。

(例6) noka anhes'im nuka hes'ɔ?

おまえが しなかったら 誰が したか?

(例7) iličoli č'ačko is'il tɛ ot'on sɔnseŋi piŋkisi usimjo

あちこち探して いる 時 ある 先生が にやにや笑いながら

nuka kačiko kas'tanin malil hes'ta.

誰かが 持って 行ったという事を 言った。

(例8) koki nuka opsninja ?

そこ 誰が 居ないのか。

(そこに誰が 居ないのか)

そこ 誰か 居ないかね。

(そこに誰か 居ないかね)

(例6) の「nuka」は「誰が」とのみ訳しうる。

(例7) の場合「誰かが」とのみ訳しうる。(例8) の場合は、「誰が」とも「誰かが」とも訳しうる。

「nuka」の一語で「誰が」と「誰かが」の両義を現わすわけで、これは曖昧で混乱が生ずる原因となる。ではこの曖昧さを解決する方法はあるのであろうか。「誰が」は、疑問表現にしか現われないことがまず指摘される。しかし、これでは不十分である。「nuka」が「誰が」と「誰かが」のどちらを意味するかは、母語話者でも文脈によって解決するより方法がない。その替りに次の補助的解決法がある。まず第一に「nuka」の異形態「nukunka (誰か)」を用いる方法がある。

(例9) koki nukunka opsninja ?

そこ 誰か 居ないかね。

「nukunka (誰か)」を使うことにより「誰か」であることが明瞭になる。第二に、話し言葉の場合では、イントネーションで区別することがある。

(例10) nuka was'na ?

誰か 来たかな。

誰が 来たかな。

(例10) は上昇調で言えば「誰か」であり、下降調で言えば「誰が」であるとされる。⁽¹¹⁾

ところで「nuka (誰か)」と言う場合、必ずしも発話者が本当にそれが誰であるかわからないというわけではない。実際はわかっているのに「nuka (誰か)」と言う場合がある。またこの場合の「nuka (誰か)」で示される者は、三人称に限らない。

(例11) nuka molil ĕul alas'ŏ?

誰かが知らないと思ったか。

(誰かが知らないとも思ったのか)

これは、ある密告者を人々が詰問している場面である。この場合、「nuka (誰か)」は、一人称複数を示している。

(例12) nuka ĕukil ĕul alas'na?

誰かが死ぬ こと 思ったか。

(誰かが死ぬとも思ったか)

これは、ある男が死んだ息子を思い出して言っている言葉である。この場面の「nuka (誰か)」によって示される者は、死んだ息子である。従ってこの場合の「nuka」は二人称と解しうる。

以上のことから「nuka (誰か)」によって示されるのは、常に三人称であるわけではないことが明らかになる。

2-2-2 「nuku+nin」

「疑問詞+nin」についても、従来ほとんど言及されてないようである。筆者は、文学作品中に次の例を見出した。

(例13) nukun nŏmank'ŏim mollaso ilŏnŏn ĕul ani?

誰かは あんたくらい知らないでこうすると思うの。

これは、主人公の家族がお手伝いさんに対しいやみを言っている場面である。同様の例はMartin氏の辞書にも出てくる。⁽¹²⁾

(例14) nukunŏn pame ĕataka oĕum s'as'tejo.

“Someone I know” wet his bed last night./

これらの例より次のことが言える。「nukunin (誰かは)」は、「nuka (誰かが)」とは異なり、「誰かさんは」というように一義にしか解し得ない。この場合にも、誰であるかということは対話の当事者にはわかっているのである。「nuka」の場合と同様の点は、それにより示される者が第三人称に限定されていないということである。(例13)の場合は一人称、(例14)の場合は二人称か三人称である。但し、何人称の人をこれにより示しているかは、文脈によってのみ解しうる。

2-3 叙述部に疑問詞を含む疑問表現

叙述部に疑問詞を含む疑問表現において、日本語と朝鮮語には差異が生ずる。朝鮮語では、所謂主語は「nin・ka」のどちらでも示しうる。

(例15) ikos̥i muosipnik'a ?

これが何ですか。

(これは何ですか)

ikos̥in muosipnik'a ?

これは 何ですか。

(例15) のように「nin・ka」の双方を用いるとすれば、両者に差異があるのかどうか、あるとするとどういう差があるか、ということが問題になる。濱田敦氏によれば、「対とすべきものが顕現していない、いきなりの問いにそれ(nin…筆者注)を用いることは、絶対に、とは云えないにしても、普通ではない」とされる。ところが今回の調査では次の例がみつかった。場面は、久しく会ってない二人が偶然再会し、話し始めるところである。

(例16) ēikim ēonkogin muečjo ?

今 専攻は 何だい。

こう尋ねられた男は何も答えず、質問者は更に次の質問を発する。

(例17) i salama talp^hεŋi ɕonkoŋi ta mwonka ?

おい君 タルペンイ専攻が 一体何かね。

このように、いきなりの問いで所謂主語が「nin」で示される場合もある。インフォーマント調査によってもいきなりの問いに「nin」が用いられる場合もあることが、確認されている。

このことは、次のように解しうるであろう。まず、濱田氏の御指摘の如く、長年にわたる日本の侵略の結果、日本語が影響を与えたのではないかと考えられる。朝鮮の近隣で「nin・ka」にあたる助詞を有するのは日本語のみであるから、影響を与えたとすれば日本語である。或いは、朝鮮語内の歴史的変遷により、提題の機能を持つ「nin」がこのような場合にも使用されるに至った、とも解せる。更には、次の解釈もされるのではないかと思われる。それは、濱田氏の扱われた資料が現代語とは異なって、古い時代の朝鮮語の言語資料であった。また、日本と朝鮮の当時の政治的関係からして、扱える資料が制限されていたために、資料が部分的であり、現代語ではこの例がある程度一般的な表現であることを決定できるだけのものではなかったのではないかと考えられる。

2-4 否定的表現における「nin」 と「ka」

否定的表現は、品詞や文の構造によって各種の形が区別されるが、この章ではその一部をとりあげる。

まず、名詞文の否定について見てゆく。名詞文の否定は、普通次のような表現になる。

(例18) kikōn k'umi anio's'ta.

それは夢で なかった。

(例18) の場合「k'um (夢)」には「i」がつくのが普通の表現である。で

は「k'umi (夢が)」を「k'um̄n (夢は)」とできないかということ、これは可能である。次のような例がある。

(例19) kilona k'omann̄n ikwaglesonseg̃i i čok̄n aniōs'ta.

しかし チビは 李廣徠先生の 敵は なかった。

このように「n̄n」も使いうるとすれば、「n̄n」 「ka」の差は何か、ということが問題になる。筆者は、「čok (敵)」に「i n̄ (は)」をつけると強調的な表現になると考える。

次に否定的な「opsta (ない)」について見る。この場合にも日本語との差異が認められる。

(例20) nahant^he mus̄n put^haki opss̄o?

私に 何か 頼みが ない。

(例21) kuḡkim̄i ḡil hek̄j̄olhal pagp̄opi opsta.

うとうしさを 解決する 方法が ない。

(例21)の「pagp̄op (方法)」は、日本語では「ハ」をつける場合が多い。しかし朝鮮語では「pagp̄opin」とすると強調的な表現になる。

(例21)の文では、「解決」する人が明示されることがある。この場合「解決」する人は「n̄n」で示すことが多い。

(例22) iloḡhan koḡkj̄ogsokesoto mankin̄n kačok̄t̄il ap^heso...

このような光景の中でも 萬基は 家族たち 前で

pulp^hj̄oḡil malhan̄n ili op̄s̄os'ta.

不平を いう ことがなかった。

(例22)の場合、このように「~n̄n~i (〜ハ〜ガ)」の組み合わせが普通である。しかし、「~ka~ka (〜ガ〜ガ)」の組み合わせもできる。その場合は、「mankika...malhan̄n (萬基が...言う)」までが「il (こと)」にかかる連体修飾節と見做される。「~n̄n~n̄n (〜ハ〜ハ)」 「~ka~n̄n (〜ハ〜ガ)」の組み合わせは、双方共強調と見られる。

ここで「~nin opsta (～はない)」が強調的であるということに対する説明が必要になる。説明は次のようになる。

「nin」には、二種の機能があると思われる。まず「提題」の機能がある。ここでいう提題とは、ある語をとりあげ、それに対して説明を加える、という意味にする。提題によってとりあげられる語の元の機能は種種である。もう一方の機能は「対照」である。これについては7頁で説明した。

一文中に二回以上「nin」が出てくる場合には、それらの機能は次のようになる。一回目の「nin」は提題の機能が顕在している。対照の機能は、潜在している。但し、これは対話者が対照される語を意識している場合には顕在する。二回目以後の「nin」は、提題の機能は潜在化し、対照の機能が顕在化する。

「~nin~nin opsta (～は～はない)」の後の方の「nin」が強調的であるということは、次のように説明される。即ち、これは、対照の機能を持っているのに対照されるべき対照を欠いている。それ故に強調的となっているものと考えられる。

2-5 「nin・ka」の省略。

今までは「名詞+nin・ka」について見てきたが、最後に「nin・ka」の省略について調べる。

朝鮮語では、所謂主語となりうる語が、「nin・ka」を伴わずに現われることがある。まず問題になるのは、問題の名詞が「nin・ka」を伴わないものであったかどうか、ということである。伴ない得ないものというのは、他人に対する呼びかけの場合である。この場合、名詞は発話者の声のとどく範囲にいる人を指す語で示される。またその語に対する叙述がないことも特徴である。発話者の声の届く範囲に居ない人を示す名詞であれば、それは呼びかけでない。但し、呼びかけかどうか不明である場合もある。

発話者の声の届く範囲にいる人を示す名詞があげられ、その後にその名詞に対する叙述が続く場合がそうである。この場合は曖昧である。

次に問題になるのは、「nin・ka」を伴ないえた語であるならば、そのいずれが省略されたのか、ということである。これは双方共あることが明らかになった。

次の諸例は「ka」が省略されたと推測される例である。

(例23) op'a. kii mjoē^hsie tolaontan mal mos tilos'su?

兄さん。あの人何時に 帰るって こと 聞か なかった。

(例23) で「kii (あの人)」は、「tolaonta (帰って来る)」と結びついて「mal (こと)」に対する連体修飾節となっている。連体修飾節中の所謂主語は、少数の例外を除き、「ka」で示されることは既に述べた。この場合は、その例外にあてはまらず、従って「ka」が省略されたことが明らかである。

次の例も「i (ガ)」の省略であろう。

(例24) kinte ōti is'os'kie kilohke sosik opsos'na?

ところで どこ いたことに そんなに 消息 なかったか。

(ところで どこにいて そんなに)

「opsta (ない)」の所謂主語は、前述の如く「ka」で示されるのが普通である。「nin」は強調的であり、それ故に省略されるとは考えにくい。

(例25) ēokwiteēaŋ haton sek'i. ki sek'i ēikim namtemun

赤衛隊長 していた奴 その やろう 今 南大門

sitageso p^homoktaŋsa haku is'tola.

市場で 反物屋 して いたんだ。

(例25) で「sek'i (やろう)」は二回出ているが、同一人物を指す。初めの「sek'i (やろう)」は、これについて話す、ということを聴者に示す働きをする。これは、提題的な語である。従って二回目の「sek'i (やろう)」は、

提題を示す「nin」がつき得ず、「ka」が省略されたことが推測される。

以上の例では「ka」が省略されていたが、次例では「nin」が省略されている。

(例26) apuči. na se os ipku čatopč^{ha} t^haku sane

父ちゃん、僕 新しい服 着て 自動車 乗って お墓に

kas'tawas'ta. /

行って来た。

(例26) の場合、「apuči (父ちゃん)」は、文中にこれに対する叙述がないので、明らかに呼びかけの語である。次の「na (僕)」は、「nin」が省略されている。「na (僕)」は連体修飾節に含まれていないし、何より決定的なことは、「ne (僕)」となっていないことである。朝鮮語では「na (僕)・no (おまえ)」に「ka」が後続すると、必然的に「ne (僕)・ne (おまえ)」となる。従って「ka」が脱落したとしたら、「僕」は「ne」になっている筈なのである。

(例27) no iōe mwola kiles'o ?

あんた 今 何だとして そうした。

この場合も(例26)と同様である。「ne (おまえ)」となっていないことが「nin」省略の証拠となっている。

結語

「nin・ka」の問題は、それと平行する助詞「ハ・ガ」を持つ日本語でもそうであるが、極めて重要かつ興味ある問題である。ところがその研究は未だ充分なされたとは言いがたい状態にある。また、日本語との関係で言えば、「ハ・ガ」との対照研究ということが重要な問題であろうが、これも充分でない。本稿では「nin・ka」の具体的な性質用法について考察してきたが、対照については今後の課題としたい。

注

- (1) 李基文『國語史概説』、金亨奎『國語史研究』
- (2) 新村出、村山七郎・梁柱東・李基文氏等の研究がある。
- (3) 服部四郎『日本語の系統』
- (4) 金敏洙『新國語學』
- (5) 藤岡氏の説と金氏の説の一致は9項目、服部氏の説との一致は10項目にのぼる。
- (6) kīnin ē^ham ēal seŋkjos'ta.
彼は 実にいい顔だちをしている。
- (7) 日本語・朝鮮語の対照研究については、北嶋静江氏の「日本語朝鮮語対照言語学の展望」（朝鮮学報第85輯）がある。
- (8) 朝鮮語の助詞は、前に来る名詞が母音終りか子音終りかで形が変わることが多い。「nīn・īn」 「ka・i」 もそうで、「nīn (は)」 「ka (が)」 は母音終りの名詞につき、「īn (は)」 「i (が)」 は子音終りの名詞につく。
- (9) 金敏洙『國語文法論』1971。
- (10) 市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説』。
- (11) S. E. Martin 氏の説。
- (12) Samuel E. Martin, Yang. Ha Lee, Sung-Un Chang, New Korean English Dictionary.

なお、朝鮮文字のローマ字転写には、許雄氏（『國語音韻學』）の音素表記を用いた。

（大学院学生）